

特集

胸部画像診断における異常所見の表現法—私が使う表現法—

How to describe the abnormal findings in chest imaging diagnosis

特集を企画するにあたって

川崎 一輝

国立小児病院呼吸器科

Kazuteru Kawasaki

Division of Respiratory Medicine, National Children's Hospital

最近の小児画像診断は、CTやMRIをはじめとする優れた検査法の開発・改良によって着実に進歩しつつあります。すなわち画像はより鮮明になり、しかも撮影後にある程度自由に加工でき、検査時間は著しく短縮され、被検児への侵襲性はより少なくなってきました。私たち小児科医は正確な理論はよくわからなくても、得られた画像のすばらしさにただただ感心させられることも少なくありません。

しかし、こうした技術面の著しい進歩がある一方で、画像診断には置き去りにされつつある(?) 重大な一面もあります。それは画像所見の表現法です。

「肺野に影がある」、「肺野がきたない」、「肺野があかるい」、どんな陰影でもすべて「浸潤陰影」としてしまふ、安易に使ってしまう「間質性陰影」、などなど。ポリクリの学生やフレッシュマンならまだしも、臨床医になって何年にもなるというのに、画像所見を説明しようとするとき未だにもどかしく感じてしまうのは、きっと小生ばかりではないことでしょう。

そこで今回、胸部画像診断における異常所見の表現法というテーマで特集を企画致しました。最も身近な胸部の画像検査である単純X線

写真とCTを取り上げて、それらにしばしば認められる異常所見を、それぞれの専門医にご自身がふだんから使われていることばで表現していただくという企画です。もちろん、この特集で紹介された表現法をそのまま教科書にしてくださいという主旨ではありません。

今回のテーマは本学会においてどうしても避けることの出来ない基本的な問題です。「ことば」はそれを使う人すべてに共通でなければ意味がありません。残念ながら今はまだ「ことば」が確立されているとは言えません。表現は幼稚だがよく理解できる「ことば」もあれば、人によってまったく異なった意味に受け取られている「ことば」もあります。したがって、この特集をきっかけに今後画像所見の表現法についての活発な議論が展開されることを大いに期待しています。

専門医として三人の先生方にご執筆をお願い致しました。この厄介なテーマを快くお引き受けいただきましたことを、この場をお借りして心より感謝申し上げます。会員の方々には是非ご一読いただき、明日からの画像診断にお役立っていただきたいと思います。